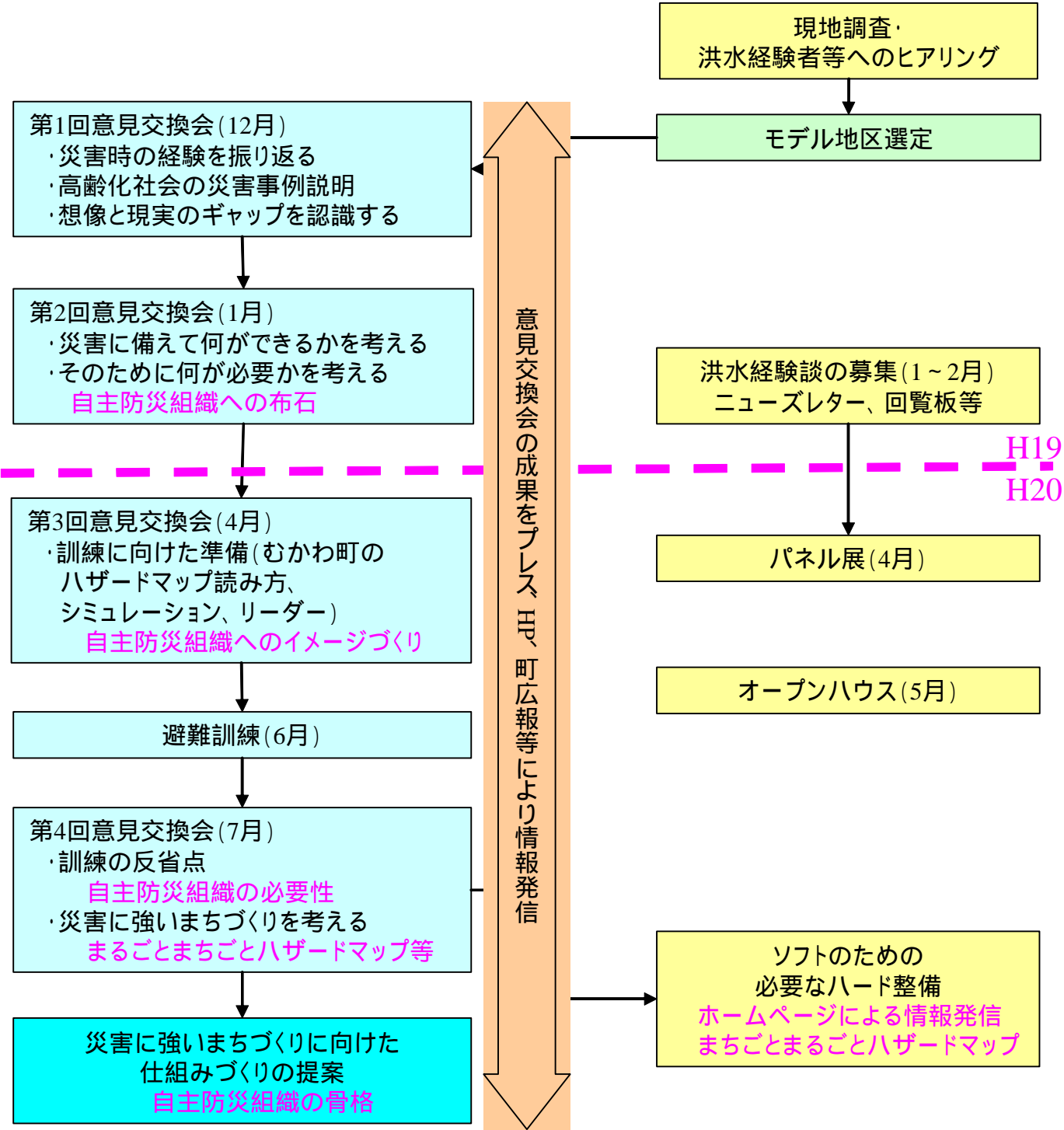


災害に強いまちづくりの資料

災害に強いまちづくり 検討フロー(案)

【モデル地区での取り組み】

【町全体での取り組み】



【参加者】
 地域住民、主要団体(農協、漁協、商工会、地元企業、消防団等)、その他(被災経験者、婦人会、環境団体等)
 【職員サポーター】むかわ町役場
 【事務局】苫小牧河川事務所、建設技術研究所

災害に強いまちづくり ヒアリング資料

黒字：活動や状況 赤字：課題

項目	内容
意識	洪水の被害があっても、農家や漁師など一部に限られるため、一般の住民は災害に対して他人の意識が強い。
	災害の恐ろしさを話したり、災害に強いまちづくりを提唱するなど、意識の向上が重要。訓練でどういうことができるかを考えたりすることが必要。
	生田と旭丘は孤立しがちなので自分達で何とかしないといけないという意識が強い。
	市街地の住民はあまり危機意識がないのではないかと課題。
情報	JA むかわでは、FAX で JA から農家に一斉に情報を発信する。
	むかわ町では、穂別地区は光ファイバーと CATV を整備中で防災情報システムを組み込む予定。鶴川地区でも検討したい。
	むかわ町では、防災無線の整備などを行っている。
	むかわ町で、水害発生時に災害対策本部を設置するが、地域情報が本部に寄せられない。単発的な地域の概要は入るが、どういう人が避難しているかなどの細かい情報は入ってこない。
	むかわ町では、市街地は屋外のスピーカーで放送しているが聞こえづらいなどの苦情がある。
	むかわ町では、市街地以外は各戸に設置された個別受信機で情報を受け取っている。
	むかわ町では、河川局と情報のやり取りを行っているが、入手情報を元に地域をどうしていくかが課題であり、動き方のマニュアルが必要だと思う。
	生田町内会では、土地改良区や室蘭開建からデータを電話や FAX でもらっている。
消防署では、水害時に開発局が何をしているのか把握できず苦慮している。一級河川の情報が本部に入っていない課題がある。	
防災体制	各戸の無線機は屋外では聞こえないので拡声器で補助を行っている。H18 では消防車を停車して広報した。
	JA むかわでは、JA の連絡網で若い職員を集め、農地の巡回や土のう積みを行う。
	JA むかわに、消防団員が不足しているため JA の若い人を入団させる指示があるが、他町からの職員が多いので難しい。
	机上訓練を含め、行政の訓練不足を感じている。
	連絡網はあるが、どの情報に、何をするか、どこに連絡するか等が課題。
	防災訓練や自主防災組織の設立など、住民が自主的にできるとよい。
	鶴川漁協に対して、消防計画や防災計画を作成するように指示があったが、24 時間職員が在在するわけではないので、自治体を中心にみんなで対応を練る必要がある。
	苫小牧市の自主防災組織は組織率が高いが、継続的な訓練はしていない。
	行政が土のうを用意してくれているので、警報が出たら住民が積みに行く。
	防災組織よりも地域の結びつき・助け合いが大切。むかわ町は自治会単位でよく助け合っている。
消防署には、H18 に災害対策本部からパトロールの依頼があった。	

災害に強いまちづくり ヒアリング資料

黒字：活動や状況 赤字：課題

項目	内容
避難	JA むかわでは、農協青年部と組合職員との連絡網があれば、いざというときに高齢者の避難援助ができる。
	JA むかわからは、避難生活が長期化したことがないので炊き出しや米の提供を行ったことがない。
	隣近所の情報を大体把握しており声を掛け合って避難している。
	避難所に自家発電機が無いので停電が不安。
	むかわ町では、職員の高齢化や職員数の削減により、避難誘導などの人員が不足する可能性があるため、各地域の自主防災組織の手助けが必要。
	自己判断して避難勧告に応じてくれない人や、避難者から早く帰らせると苦情がきたり、勧告解除を待たず勝手に帰ってしまう人がいる。
	消防署では、独居老人リストを作成しているが、水害が起きたら駆けつけるような体制になっていない。
	鶴川漁協からは、避難所として指定されている宮戸小学校は遠すぎる。
	生田町では、自治会は地域付き合いの中で住民情報を持っているのでどの人をどこに避難したらよいか消防団に指示を出している。
	H18 での穂別地区の孤立時には、急病人や避難所の夕食・朝食をゴムボートで運んだ。
	住民は「まさか自分のところが…」という意識が強い。消防や災害対策本部が直接説明した方がよい。
	鶴川漁協では、日本水難救難所のゴムボートを使って援助が出来る。
個人的に近隣の人たちが避難したか確認するが、自治会として避難体制は整えていない。	
災害後	JA むかわでは、農家組合と一緒に被害調査やハウスの復旧を行う。
その他	小河川の水位が上がると、毎回同じ農家の農地が被害に遭う。この結果、離農せざるを得ない農家もある。
	治山工事が必要。
	鶴川にも洪水調整用のダムが欲しい。
	生田地区は、普段から住民がお互い面倒を見合っているため、人間関係が非常に良い地区。小学校の運動会などが地域住民の交流の場となっている。
	生田地区では、上流の電柱が倒れると電気が来なくなってしまう。平成 18 年は 24 時間電気が来なかった。
	生田地区では、水は簡易水道を山から引いているが、大水の時には濁ってしまう。
	水害が起こりそうなときは、まず独居老人が避難する。
高齢者は一番最初に自分で避難する。	